

# 神護寺藏「和氣氏三幅対」の成立と訓釈（補訂）

## 要 旨

本誌の前々号、第四十六号（平成二十五年三月刊）に「神護寺藏『和氣氏三幅対』の成立と訓釈」を執筆した。この三幅対とは、江戸時代初期に高雄山神護寺の開創に関はる和氣清麻呂の後裔の半井瑞雪が同寺の復興に寄与するとともに、先祖清麻呂の功績を振返り、その後の和氣医学の道統を顕彰するために、和氣氏の三名を選び、その肖像画に三名の禅僧（黄檗宗、臨済宗）それぞれに賛の詩偈をつくり揮毫するやう依頼し、三幅対として同寺に寄進したものである。筆者はこの三つの偈について、本文を解説し、訓読して書き下し文にした上に、現代語訳をして、語釈を注釈的に施し、併せてその偈の成立と揮毫者について考証し、史的に位置づけた。

このやうな訓釈は初めてのことであつたが、発表した後に判断の誤りや不十分な点があることに気づき、また新たな史実を知って書き改めなければならなくなつた。しかも最近本誌の論文が本学の機関リポジトリに保存し、公開されることになり、このまま放置すると、誤った説が定着する恐れがある。そこで、以下の四件について、改めて調査、研究をし直し、最小限の補訂をすることにした。今後は、前稿のうち本稿に該当する以外の部分と本

若井 勲夫

稿とを筆者の論述とする。なほ、将来としては、いづれ成書としてまとめる予定の『和氣清麻呂公景仰史』の附篇の一篇として、この補訂稿を取入れて本文を整へる。以下、修訂する概要は次の通りである。

（一）前稿で「和氣氏三幅対」を奉納した半井瑞雪を「瑞雪（宗閑）、宗閑（瑞雪）」と記し、両者を同一人物と判断してゐた。しかし、半井本家の系図によりこれは誤りであることが判明し、両者は別人であつたので、修正する。

（二）前稿で賛の偈をつくり揮毫した二人の僧侶は「前南禅」を名乗つてゐて、これを単純に字義通り南禅寺の前住職と判断してゐた。しかし、これは誤りで、正しくは京都五山の臨済宗で僧の重要な資格を表すものであつた。よつて、その説明をして修正した。このことから、三幅の絵に対する賛が出来上つた時期も考証し直して改めた。

（三）「和氣氏三幅対」と同じころに前南禅の僧が偈を揮毫した「和氣清麻呂公像」の依頼者と画家の名は前稿で記したが、どういふ人物かは不明で説明しなかつた。しかし、今回、調査を進め、推定できる程度に達したので補足した。

（四）前稿を執筆する段階では三幅対を描いた画家については、不明であり、触れることはしなかつた。しかし、その後、徳川三

代將軍、家光がその三幅の賛偈が完成した十、二十年前、半井成忠に狩野三兄弟の描く「三幅一対」を下賜してゐることが分つた。この両者が同一のものかどうか、さうであるならば三幅対の作者は狩野三兄弟といふことになる。しかし、そのやうに断定する史料に乏しく、画家についてはやはり不明で、今後の課題であるとした。

キーワード：神護寺蔵「和氣氏三幅対」、和氣清麻呂、半井瑞雪、半井成忠、狩野三兄弟筆三幅一対

## はしめに

本誌第四十六号（平成二十五年三月）に「神護寺蔵『和氣氏三幅対』の成立と訓釈」を執筆した。これは、江戸時代初期に高雄山神護寺の開創に関はる和氣清麻呂の後裔に当る、半井瑞雪が同寺の復興に寄与するとともに、和氣清麻呂の功績を追慕し、和氣医道の道統を顕彰すべく、和氣氏の三名の肖像画に対して三名の禪僧それぞれに賛の偈を詠んで、揮毫するやう依頼し、それを一括して寄進したものである。筆者はこの三幅の偈について、本文を解読し、訓読した上に、現代語訳をし、語釈を注釈的に施し、その偈の成立と揮毫者を考証し、史的に位置づけた。

このやうな訓釈と考察は初めてのことであったが、発表の後、判断の誤りや不十分な点があることに気づき、また、新たな史実を知り、このまま放置しておくことができなくなった。そこで、以下の四件について、改めて調査、研究をし直し、最小限の補訂を加へることにし

た。今後は、いづれ成書としてまとめる『和氣清麻呂公景仰史』の附篇の一篇として、本稿のそれぞれの内容を前稿の該当する箇所に入れ、修正、増補して本文を定める予定である。以下、補訂する概要は次の通りである。

（一）前稿で「和氣氏三幅対」（以下、和氣氏三幅対、または三幅対と書く）を奉納した半井瑞雪を「瑞雪（宗閑）、宗閑（瑞雪）」と記し、両者を同一人物と判断してゐた。しかし、東京在住の半井本家の系図に基づき、これは誤りで、両者は別人で、弟と兄であった。

（二）前稿で偈をつくって揮毫した臨濟僧の二人は「前南禅」を名乗つてゐて、これを単純に南禅寺の前住職と判断してゐた。しかし、これは誤りで、正しくは京都五山の臨濟宗で僧の重要な地位を表すものであった。よって、その説明をし、それに基づいて修正した。また、これに應じて、三幅対の成立時期も考証し直し、改稿した。なほ、ここで「成立」といふのは肖像画が描かれたことではなく、既に出来上つてゐた絵に詩偈の賛がそれぞれに揮毫され、三幅が揃つたことを指す。

（三）和氣氏三幅対と同じころに成立した前南禅の僧が偈を揮毫した「和氣清麻呂公像」の依頼者と画家の名は前稿で記したが、どういふ人物かは不明であった。しかし、今回、調査を進め、推定できるので、補足する。

（四）前稿では三幅対を描いた画家については不明で、何ら触れなかった。しかし、その後、徳川三代將軍、家光がその三幅対への揮毫が出来上る、十、二十年前、半井成忠に狩野三兄弟の描く「三幅一対」

を下賜してゐることが分つた。この両者が同じものかどうか、もしさうであるならば、三幅対の作者は狩野三兄弟といふことになる。しかし、それを証する史料が十分になく、両者が同一であるといふ結論には至らなかった。ここでは問題の所在のみを提示しておく。

### 一、奉納者の半井瑞雪は半井宗閑と別人物

和氣氏三幅対を神護寺に寄進、奉納した半井瑞雪が別名、宗閑であることをこの先駆的な研究者である宗田一と杉立義一が記述してゐた<sup>(1)</sup>。しかし、その説明は何らなく、半井家の系図に「瑞雪（宗閑）」と記すだけである。また、三幅対の内容に関して後者と論議を続けてゐた筆者はこのことを自明のごとく諒解し、疑問にも思はず、従つてゐた。しかし、前稿を発表した後、東京（江戸）半井家に伝はる家系図の写真版を見てゐて、宗閑と瑞雪が別々に並んでゐて（このことはかねて気づいてゐたが）、その行間の細字による記述が両者どちらの側の説明にもとれる曖昧さがあることを発見した。

そこで、平成二十五年五月、半井家の菩提寺である大徳寺の塔頭、真珠庵で家系を確認するため同寺を訪れた。ここには中世後期の二十三代半井（和氣）明親<sup>あきちか</sup>より近世中期の三十一代半井成庸<sup>なりつね</sup>までの墓群がある。住職の山田宗正によると、位牌や過去帳には法名のみが記されてゐて、俗名その他は書かれてゐないといふことであつた。そして、現在、同家の文書は東京大学史料編纂所の手によって整理、編纂中であることを知らされ、東京半井家の当主を紹介していただいた。

続いて、六月に同家（半井本家）の半井直哉に家系図について問合せ、その写真をお送りいただいた。これに基づき分析して、不審な点が解明され、従来の説が誤りであることが分つた。以下、その論拠を説明する。

（1）東京半井家に伝はつてきた家系図をもとにして近年、新しく書き改めて調へられた「和氣朝臣家系図」（縦系図で軸物）によると、成信<sup>なりふ</sup>（瑞桂）の三男宗閑と四男瑞直について次のやうに記されてゐる。

○宗閑 慶安元年六月十六日卒 法名脉翁宗源靈位

○瑞直 号琢庵 後名瑞雪 延宝四年七月二日卒 法名唯足軒月叔瑞雪居士 法名覚林院殿瓊室宗瑤禪定尼 寛永十年九月十二日卒

宗閑は慶安元年（一六四八）に没してゐて、三幅対の成立時期（承応二年（一六五三）〜寛文四年（一六六四）ごろ。後述）には生存してゐない。法名は簡単で、本家の通り字「瑞」は使はず、真珠庵の半井家墓地には葬られてゐない。

一方、瑞直は後に生存中に名を改め（後名<sup>こうめい</sup>）、法名は「月叔瑞雪」と上下の「月」と「雪」が対応する定式に従つて付けられてゐる。真珠庵蔵『和氣家世々墓所図<sup>(2)</sup>』では瑞雪とその室の墓碑に「唯足軒月叔瑞雪居士」「覚林院殿瓊室宗瑤大姉 月叔之室」とそれぞれ刻まれてゐる。以上によつて、瑞雪はもとの名が瑞直で、医師として琢庵と号したこと、宗閑は兄であり、同一人物ではないことが明確になった。

（2）右の家系図のもとなつたと思はれる「半井家系図」（横系図。当時、半井布文〈現当主の先代〉蔵）は一部が写真版として公刊されてゐる<sup>(3)</sup>。これによると、宗閑は記述がなく、瑞雪は「遁世後塚<sup>マツ</sup>（縁

の誤りか)改瑞雪 惟足軒月叔」とあり、(1)の記述とはほぼ一致する。ただ、この書き方をよく見ると、瑞直の説明が宗閑により近づけて書かれてゐる。また、宗閑の兄の瑞澤の記述は左右の両側にあってよく分るが、瑞直の弟の瑞益は「号久庵」が瑞直寄りに書かれて、紛らわしい。この不揃ひの記し方から宗田、杉立をはじめ筆者も「遁世後…」を宗閑に関する説明と誤認したのである。両氏とも参考文献にこの古い系図だけを挙げてゐることから、その執筆の時点で前述の「和氣朝臣家系図」は新調されてをらず、見てゐなかつたのであらう。

(3) 堺半井家に繋る津田家がある。同家は津田宗久の娘の栄薫が堺半井家の云也(卜養)に嫁ぎ、その本流を保った。その津田家に伝はる「和氣半井家系図」(京都、半井英江蔵)に次のやうに記す。「瑞澤 号蛛庵 任法師/宗閑/瑞直 号琢庵 後改瑞雪惟足軒月叔瑞雪/瑞益 号久庵」。右の(1)(2)に一致してゐる。

(4) 『寛永諸家系図伝』十五や『系図纂要』十四など公刊されてゐる系図集では、宗閑は無記入、瑞雪は前者で「琢庵」、後者で「瑞直 遁世後改瑞雪」と記す。

以上の調査により前稿の「瑞雪(宗閑)、宗閑(瑞雪)」は誤りで、正しくは「瑞雪(瑞直、琢庵)」と記すべきことが判明した。ただ、前稿の記述(四一三頁下、四〇七頁下、三九四頁系図)の宗閑を削除するだけでなく、瑞雪についての記述そのものは改める必要がないことを付言する。なほ、正しい系図を本稿の末尾に示す。

## 二、「前南禅」の意味

三幅対の賛偈の作者について、和氣真人(清麻呂)像は隠元隆琦が追薦した句を弟子の獨知(慧林性機)が書き、和氣時成像は前南禅旻叔顕暉、和氣基成像は前南禅九藏中達がそれぞれ自作の句を揮毫した。前稿で、「前南禅」を文字通り南禅寺の前住職と単純に解釈し、それ以上に追究しなかつた。しかし、これは大きな誤りで、正しくは臨済宗における僧の位として重要なものであることがその後の調べ分つた。以下、説明する。

「前南禅」(前任南禅、準南禅)とは「補任されるが、入院(入寺のこと)の式を行わない他山の僧」のことで、「紫衣を身にまとい名譽となる」ものである。これは「南禅寺の歴代にはならないが南禅寺の前住位」といふ称号である。これを踏まへて、前稿(四〇二頁下段)の「前南禅旻叔老柄顕暉」の部分に次の通り改める(なほ、顕暉の暉について、「暉」は誤植であつた)。

○旻叔顕暉(天正八年(一五八〇)―万治元年(一六五八))は相国寺の子院、慈照院の住職から同寺鹿苑院に遷り、第四十六代の僧祿司に任ぜられた。僧祿とは臨済宗の寺院を取締り、僧の人事をつかさどる役職である(ただし、鹿苑僧録はこの代で廃絶し、以後、南禅寺金地院に移された)。その後、相国寺第九十四世の住持を務めてゐる。詩偈で「前南禅」といふ肩書きで表したのは、寛永十七年(一六四〇)に不住の「前任南禅」の資格を得たことによる。この僧位は他山の住持よりも高い位で、南禅寺の「準世代」とも称せられ、最高位の深紫

衣を着用することが許された。南禅寺は「天下五山の上」に位置する寺格があったのである。顕暲が明暦二年（一六五六）に揮毫した書の落款は「禅」の漢字の扁と旁の間に「南」の漢字を配して「南禅」を意味する印と、听叔の印の二つを押してゐる。「老衲」の衲は僧侶の自称で、老僧を謙遜して言ったのである。<sup>10)</sup>

次に、九巖中達について、まづ前稿（三九八頁上段の左七～五行）を次の通りに改める。

○九巖中達は建仁寺の第三百代住持を務めたが、「前南禅」を名乗った理由と詩偈を作った時期については次項で述べる。

続いて、同頁の下段、〈成立〉の部分の次のやうに改める。

○半井瑞雪が「賛詞」を頼んだことは分るが、その時期がいつかについて考証しよう。九巖中達は前述の通り建仁寺住持であったが、承応二年（一六五三）に南禅寺に入寺した形を取り「準世代」の称号を与へられた。<sup>11)</sup>これは先の听叔顕暲の「準南禅（前南禅）」と同じく、南禅寺住持に準じる扱ひである。中達は万治四年（一六六一）に没してゐる。従つて、詩偈を書いたのは承応二年から万治四年の間といふことになる。

以上の考証に基づき、三幅対の成立時期を次のやうに訂正する（前稿の三九八頁下左三行目から三九七頁上五行目）。

○ここで、改めて成立時期についてまとめる。基成像が承応二年（一六五三）から万治四年（一六六一）の間、その中間に、時成像が明暦二年（一六五六）に出来上った。清麻呂像の偈は万治二年から寛文二年（一六六二）の間に作られてゐるが、その揮毫が寛文二年以降の

いつまでかといふことである。瑞雪が没した延宝四年（一六七六）まで最長の幅をとると、二像が既にできてゐるのにあまりにも長過ぎる。そこで、一、二年の余裕を見て、寛文三、四年ごろまでに書き上げたとするのが順当であらう。結局、三像が完成したのは、承応二年（一六五三）から寛文四年（一六六四）までの十年あまりの間といふことにならう。正保二年（一六四五）に徳川家光から下賜された「三幅一対」を受領した（後述）半井成忠（瑞堅）が延宝六年に没してをり、年代として合つてゐる。なほ、英中玄賢の偈の揮毫は寛文十年（一六七〇）であり、神護寺の復興に合せて景仰、顕彰の動きがあったことが分る。

### 三、「和氣清麻呂公像」の依頼者と画家

三幅対の「和氣真人像」が和氣清麻呂であることを論証する補強の資料として、英中玄賢が寛文十年に「和氣清麻呂公像」に賛の偈を作ったことを前稿（四〇四頁）に取上げた。玄賢は同七年に南禅寺第二百八十世住持に就いたが翌年に辞した。そして、同十年に肩書は「前南禅」を名乗つてゐる。さて、その肖像画には「遠孫 和氣惟貞 信士請ふ」とあり、画師は「狩野成信画」と記されてゐる。しかし、この二人がどういふ人物であるか前稿では明らかにできなかった。その後、調べた結果、断言はできないが、推定できるに至り、ここに説明する。

和氣惟貞は詳細は不明だが、次のやうに推定できる。惟貞より



百三十年ほど後の医師に和氣惟享(惟亨とも)がゐて、享和、文化年間に著作をいくつか刊行してゐる。近世では既に和氣氏は半井氏を名乗ってゐるが、ほかに和氣正路といふ医師もある。惟貞は惟享と同じ通り字を使つてゐることから同族かもしれない。「遠孫」として清麻呂の肖像を請ふことは自然なことである。

狩野成信は詳細は不明であるが、狩野秀信(元俊)の子に、成信(本名は伊織)がある。秀信は狩野了琢(秀政)の子で、寛永年中に活躍し、寛文十二年(一六七二)に没した。了琢、秀信ともに西本願寺の書院に襖絵や杉戸絵を描いてゐる。秀信の年代から逆算すると、成信は玄賢が揮毫した肖像のころは三、四十代、年齢的には合つてゐる。成信は中年に画を止めたが、晩年に再び筆をとり、江戸に住んだといふ。玄賢が南禅寺に住してゐることから絵師も京都在住の者であらう。以上のことから、和氣公像の画家である狩野成信は秀信の子であると推定できよう。

#### 四、画家の問題

和氣氏三幅対の肖像画を描いた絵師が誰であるかについては、もとより署名、落款がなく、今まで問題にされず、不明のままであった。筆者もその成立の経緯、和氣真人像主の解明、また、賛偈の揮毫僧の考証とその訓釈に集中して、画家については美術史のこととして関心がなかった。ただ、本島知辰が享保十九年(一七三四)三月二十六日より始つた神護寺開帳を参観し、「清麻呂時成基成画像 但、土佐光

信筆」と記してゐることは前稿で触れた。しかし、土佐光信は室町後期の絵師であり、三幅対の成立時期は土佐派では土佐光起である。ただし、光信、光起の作品に和氣氏肖像は見当らない。また、光信の名で、狩野派では狩野光信があるが、これより五十年早い時期である。前述の狩野成信が肖像を描いてゐるので、三幅対も狩野派の絵師であらうとしても推測、常識の範囲を出ず、そのままにしておいた。

ところが、平成二十五年一月、富山市在住の作家、遠藤和子が『家光大奥・中の丸の生涯 狩野探幽と尽くした徳川太平の世』を著し、今まで埋もれてゐた事実を史料に基づきながら、小説ふう想像力を働かせて、徳川家光の時代の一面を明らかにした。このことが医師の半井家に関わり、本稿の主題とも絡んでゐた。

半井家に関係するもう一つの史料が等持院から鹿苑寺(金閣寺)住持、相国寺第九十五世住持になつた鳳林承章が書き留めた日記『隔菴記』である。承章は近縁に連なる後水尾天皇の帰依が厚く、風流心に富み、半井家を含む多くの文化人と交流した。同書は寛永十二年(一六三五)から寛文八年(一六六八)に没するまで三十四年間にわたる客観的、具体的に詳細な日常生活の記録である。本稿の主題に関はる事項が同書に綴られてゐて、三幅対の画家を探る一つの糸口となる。以下、史料によつて問題の所在を述べる。

寛永十六年(一六三九)十月、半井成忠は江戸半井家の始りである半井成近の家を継ぎ、幕府の奥医師を勤めたが、翌年六月に「上洛の暇給ひ」、勤め替へして京都に帰り、宮中の典薬師を勤めることになった。さうして、正保二年(一六四五)閏五月八日に成忠は江戸に

赴き、家光に拝謁して、「仰せによりて驢庵と改称<sup>(2)</sup>」した。この賜った号は前述した半井姓の始りの明親以来、受継がれてきた呼称である。家光はそれに加へて成忠に狩野三兄弟が描いた「三幅対<sup>(2)</sup>」以下、三幅一對と記す」と「大樹（家光）御筆之鶴鶴之絵」を贈った。これらの絵は京に帰った成忠の家で承章が「拝見」してゐる。これは間もなく「表具詠」に出され、翌年二月に出来上り、承章は再びこれを見てゐる。ただし、三幅一對の画題については全く触れてゐない。狩野三兄弟とは探幽（守信）、尚信、安信のことで、問題はこの「三幅一對」が主題の神護寺蔵「和氣氏三幅対」と同じものかどうかといふことである。

このことについて、まづ、三幅対と三幅一對が時期的に合ふことは言へる。即ち、三幅対の成立は前述の通り承応二年（一六五三）から寛文四年（一六六四）の間で、奉納者の瑞雪は延宝四年（一六七六）に没した。一方、三幅一對は正保二年（一六四五）に拝領して、翌三年に表装ができてゐる。以上により、成忠は三幅一對を受領して、十年ほど保管した後、これを瑞雪に托し、瑞雪はこれを受けて、禅僧に偈を書かせ、まづ二幅ができ、次に一幅が時間を要して、神護寺に寄進したのが、今に伝はる三幅対であると推定することは一応、可能であらう。ただ、時期として整合してゐることだけで、右が同一のものであると証明することはできない。なほ、成忠の直系の東京半井家には三幅一對は現在、所蔵されてゐない。

次に、三幅一對に関する史料が右に挙げた以外に見当たらない。『徳川実紀索引人名篇<sup>(3)</sup>』によると、成忠と三幅一對の関わりは見られない。

また、『徳川実紀事項索引<sup>(3)</sup>』によると、家光の代に三幅（対）が記録に残るのは三件あり、その内容が詳しく記されてゐる。しかし、成忠に關しては下賜の事実さへ記録されてゐない。また、承章の『隔蓑記総索引』を調べても、成忠、狩野三兄弟や三幅対は多く出て来るが、和氣氏を画題にしたものは見付けることができない。さらに、狩野派に関する文献や三兄弟筆の三幅対の絵を調べても和氣氏に關するものは記録されてゐない。

なほ、美学的な観点から疑問点を二つ挙げると、まづ中心の清麻呂像が正面を向いてゐないといふことである。しかし、これは前稿で述べたやうにさういふ場合もあり得る。次に、三幅対が表装では天地を揃へてゐるが、清麻呂像だけ本紙が少し長いといふ問題がある<sup>(26)</sup>。さらに言へば、もし狩野三兄弟筆とするならば、狩野派の絵画で、署名や落款を欠く絵画があるかどうか、また、専門的な立場から鑑定に出す必要もあるのではないか。しかし、美学美術史的な領域にまで広げると本稿の主題の範囲を越える。土佐光信・光起の調査、土佐派と半井氏との関わり、また、三幅対が三幅一對と同じものかどうかを含めて、今後の研究課題としておく。

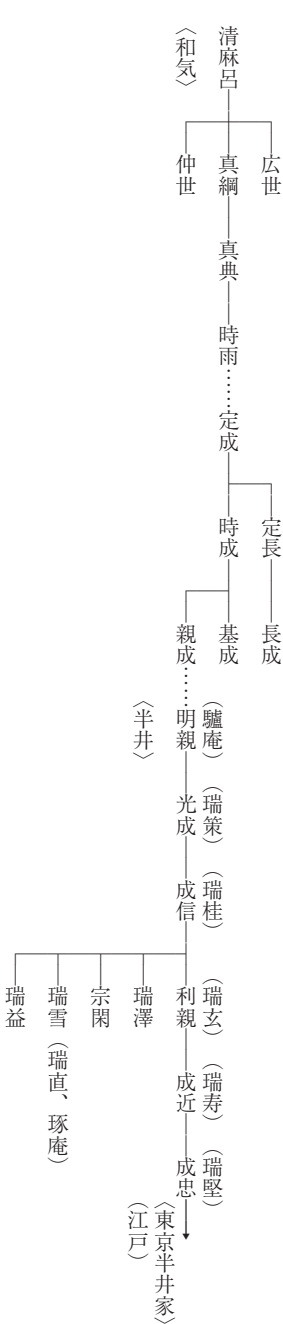
### 〔注〕

- (1) 宗田一「大徳寺・真珠庵蔵の半井家画像の補訂」『啓迪』一、京都医学史研究会、昭和五十八年五月。杉立義一『京の医史跡探訪』初版、思文閣出版、昭和五十九年。増補版、同、平成三年。「和氣・半井家

- (本流分流関連)『略系図』八、同、平成二年四月。
- (2) 『京都の医学史』京都府医師会編(杉立義一ほか執筆)、思文閣出版、昭和五十五年。
- (3) 『探訪 堺―その文化と半井家』展覧会図録、大阪市立博物館、昭和五十五年。
- (4) (1)の杉立義一「和氣・半井家(本流分流関連)略系図」。この云也の子が幕府御番医師の傍ら、狂歌に秀でた半井ト養(宗松)で、東京半井ト養家をおこした。
- (5) この津田家が途絶えることになり、同家から半井英江に譲られた。この半井家は「葉商」で「弟子などの半井姓を許容され其の名目を継ぎたるのみ」である(『和氣清麻呂公末裔調書』。護王神社初代宮司、半井真澄の今治半井家を中心に編集、大日本護王会刊、昭和七年)。
- (6) 続群書類従完成会、平成六年。
- (7) 飯田忠彦編、名著出版、昭和四十九年。
- (8) 桜井景雄『南禅寺史』下、法蔵館、昭和五十二年。
- (9) 玉村竹二『臨濟宗史』春秋社、平成三年。
- (10) 相国寺に関する経歴は次の書による。小畠文鼎撰『萬年山聯芳録』相国寺刊、昭和七年、筆耕。後に活字化されて『相国寺史料別巻』思文閣出版、平成九年。
- (11) (8)に同じ。
- (12) 富士川游『日本医学史』形成社発行、医事通信社発売、昭和四十七年。
- (13) 荒木矩編『大日本書画名家大鑑』伝記上編、第一書房、昭和五十年。
- (14) 『扶桑画人伝』二、古筆了仲、明治十六年自序。『大日本人名辞書』一、講談社学術文庫、昭和五十五年。
- (15) 竹村俊則『昭和京都名所図会』五、駸々堂出版、昭和五十九年。なほ、西本願寺書院の障壁画は狩野光信の門人である渡辺了慶とその集団によって描かれたと伝へられる(『本願寺史』二、同史料研究所編、本願寺宗務所刊、昭和四十三年。岡村喜史『西本願寺への誘い』、本願寺出版社、平成二十四年)。この作業に狩野了琢、秀信の親子が参加してゐたと思はれる。
- (16) (13)に同じ。
- (17) 前稿に取上げた東京半井家に伝はる文書「瑞雪高雄山神護寺へ寄付 東帯肖像 参幅」には画家の名は記されてゐない。また、神護寺でも所蔵の文書や箱書ともに画家名はない(同寺先々代住職、谷内乾岳の筆者宛書簡、平成三年二月二十一日付)。さらに、前稿に挙げた恩賜京都博物館の「神護寺名宝展観目録」(昭和十年。京都大学附属図書館蔵)に肖像画の説明はあるが、画家については触れてゐない。
- (18) 『月堂見聞集』二十八(京都大学文学部図書館蔵。押小路家旧蔵本、写本)。これを受けて、峨山青護(林峨山)『高雄横尾母尾巡参案内記』嘉永七年(一八五四)、矢野玄道『護王神御伝記(和氣清麻呂卿御伝記)』明治八年、にも記す(前稿に既述)。
- (19) 小石川ユニット発行、展望社発売、平成二十五年。なほ、遠藤(旧姓半井)は越前半井家に繋り、前田利家に仕へたといふ半井新九郎の後裔である(高瀬重雄「一乗谷朝倉館の曲水の宴―北越の半井氏のこ」とども)、『富山史壇』九四、昭和六十二年七月、『日本文化の史的研究』桂書房、平成四年)。
- (20) 赤松俊秀編、鹿苑寺刊、昭和三十―四十二年。復刻版、思文閣出版、平成九年。総索引、同十八年。
- (21) 『徳川実紀』三(『新訂増補国史大系』四十)、吉川弘文館、昭和三十九年。
- (22) (20)に次のやうに記されてゐる。〔正保二年〕十月十一日：帰山の次、赴半井驢庵(成忠)、自江戸、上洛之故也。打談、狩野兄弟三人之三幅巻対、見之、大樹(家光)御筆之脊令(鶴鶴)之絵拝見仕也。ただし、(21)では右のことについて何も記されてゐない。
- (23) 徳川実紀研究会編、吉川弘文館刊、昭和四十八年。
- (24) 吉川弘文館編集部編、同社刊、平成十五年。
- (25) 『狩野3兄弟―狩野探幽・尚信・安信―展図録』板橋区立美術館・群馬県立美術館刊、平成二十六年。
- (26) (17)の谷内乾岳の、別の筆者宛書簡、平成三年五月二十五日付。それでも同氏は最初から三幅対として描かれたであらうとする。



〔付図〕  
和氣・半井氏略系図



# Formation and Annotation of the Triad of The Wake Clan in the Collection of Jingoji Temple

—A Revised and Enlarged Edition—

Isao WAKAI

## Contents

### Introduction

1. Nakarai Soukan (半井宗閑) is different people to Nakarai Zuisetsu (半井瑞雪), benefactor.
2. The meaning of “Zennanzen” (前南禅)
3. The requester and painter of Wake-no-Kiyomaro's portrait
4. A subject of painter

**Keywords:** the triad of the Wake clan in the collection of Jingoji Temple (神護寺), Wake-no-Kiyomaro (和気清麻呂), Nakarai Zuisetsu, Nakarai Naritada (半井成忠), the triad drawn by the three brothers Kano (狩野)